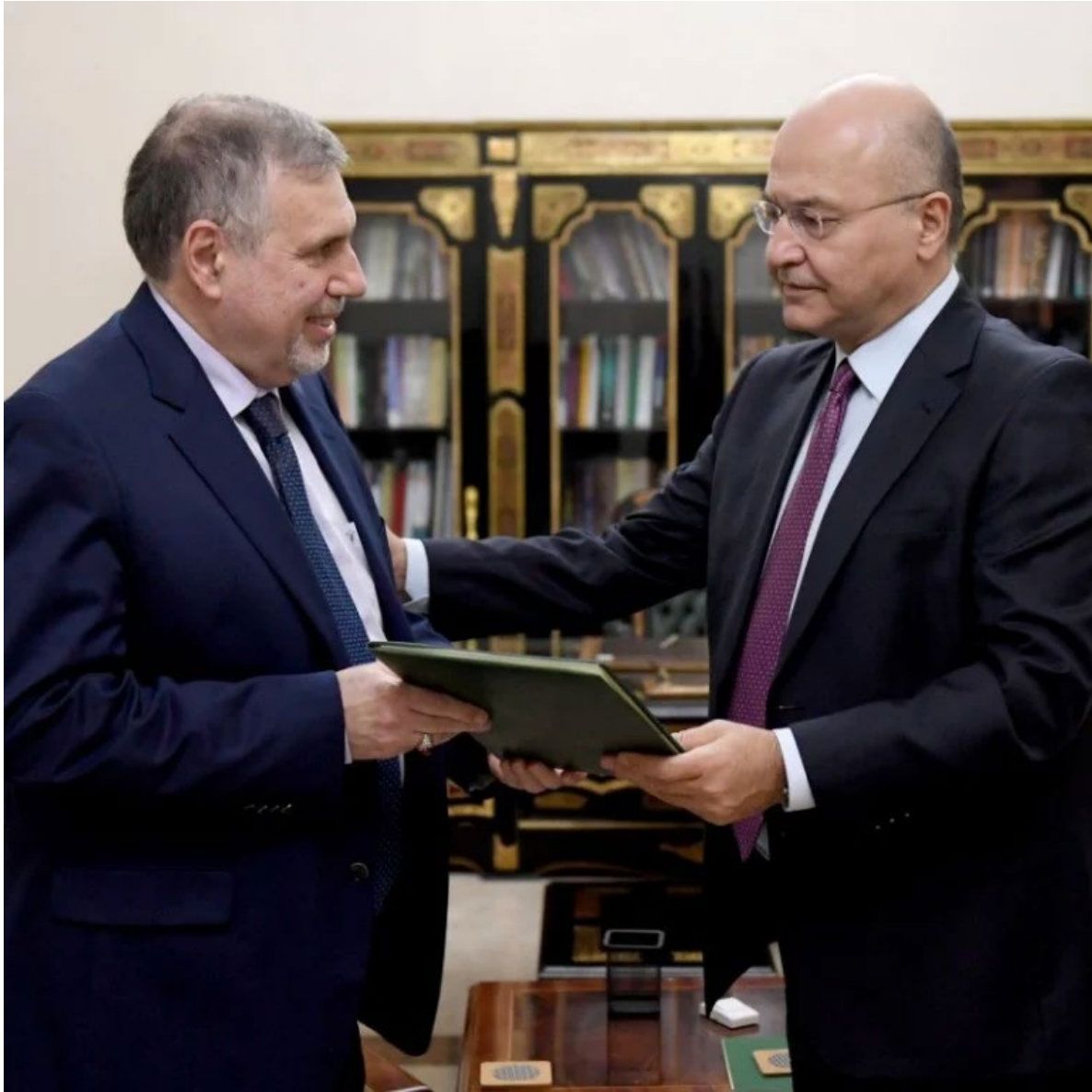


イラクの新内閣を創設する新首相が任命された



数ヶ月の抗議行動の後、イラクのバーハム・サリフ大統領は、次の内閣を作るためにモハメド・タウフィック・アラウィバグダッド/

2月26日/ IRNA-イラクトルクメンイスラム連合事務総長およびイラク法務連合のリーダーであるジャシム・ムハンマド・ジャ・ファール・アル・バヤティを任命した。

アラウィは2006年から2007年まで、そして2010年から2012年まで通信大臣を務めています。彼の在任期間はいずれもヌーリ・アル=マリキ政権時代だった。そして、アラウィはマリキの政策に抗議して2回とも辞任した。

2007年、マルキが宗派に基づく政府ポストの指定に抗議して辞任した。そして2012年、マルキの通信省問題への干渉に抗議して再び辞任した。

アラウィは政府の腐敗を根絶するための政策を実施しようとしており、彼は穏健派と見なされている。彼は2004年から2005年までインターン首相のいここです。

報道によると、アラフはサドルのサイロン議会ブロックだけでなく、バドル党首とファタハ党首ハディ・アル・アミリとハイダー・アル・アバディ元首相の支持を得ている。



- イラクのバルハム・サリフ大統領は新たな首相としてモハメド・タウフィック・アラウイを指名した。この人物はアヤド・アラウイ元首相の甥にあたり、ノウリ・アル・マリキ政権で通信相を務めている。
- シオニストの一派であるネオコンは 1980 年代にイラクのサダム・フセイン政権を倒そうとしてきた CIA と関係が深く、ペルシャ湾岸産油国の防波堤になっていたフセインを倒そうとしたのは、そこに親イスラエル体制を樹立してシリアとイランを分断し、両国を殲滅して中東全域をイスラエルに支配させたかったからだ。
- その考えをネオコンのポール・ウォルフォウィッツも共有していた。ウェズリー・クラーク元欧州連合軍（現在の NATO 作戦連合軍）最高司令官によると、国防次官だった 1991 年にウォルフォウィッツはイラク、シリア、イランを殲滅すると語っているのだ。（3 月、10 月）
- そして 2003 年 3 月にアメリカ軍は従属国の軍隊を引き連れてイラクを先制攻撃、フセイン体制を倒したのだが、親イスラエル体制の樹立には失敗、イランとの関係

が強い政権が現れた。2006年にノウリ・アル・マリキが首相になるとイラクはアメリカ支配から抜け出す動きを見せ始める。そこでアメリカは首相をすげ替えるが、思惑通りには進んでいない。

- マリキが首相になった翌年、調査ジャーナリストのシーモア・ハーシュはニューヨーカー誌に、ジョージ・W・ブッシュ政権がシリア、イラン、そしてレバノンのヒズボラを最大の敵だと定めてスンニ派と手を組むことにしたと書いた。その相手はサラフィ主義者やムスリム同胞団をさすが、フセイン体制の残党も含まれている。
- 2009年1月にアメリカ大統領はブッシュからバラク・オバマに交代するが、戦術は継承された。オバマ大統領は2010年8月にPSD-11を出し、ムスリム同胞団を主力とする体制転覆プロジェクトを開始している。
- そのオバマの政策がサラフィ主義者の支配地域を出現させるとDIA局長として警告したのがマイケル・フリン中将。その警告通り、2014年にダーイッシュ(IS、ISIS、ISIL、イスラム国とも表記)が出現、シリア東部からイラク西部にかけての地域を支配するようになった。
- そのダーイッシュを敗走させたのがシリア政府の要請で介入したロシア軍とイランの革命防衛隊。その中でも重要な役割を果たしてきたガーセム・ソレイマーニーは1月3日にバグダッド国際空港でアメリカ軍が暗殺した。
- そのときソレイマーニーはサウジアラビアとイランとの間で進められていた関係修復を目指す交渉のメッセンジャーとしてイランの返書を携えていた。この交渉を潰すこともアメリカ側の重要な目的だったのだろう。
- アメリカは昨年からイラクの親イラン政権を揺さぶるため、イラク国民の不満を利用して「カラー革命」を仕掛けているのだが、ソレイマーニー暗殺を切っ掛けにしてその抗議活動は反アメリカに変化していると伝えられている。クルド系のサリフ大統領とダボスで会談したドナルド・トランプ米大統領はイラクとアメリカとの蜜月を演出したが、逆効果だろう。首相交代でイラク情勢が劇的に変化するとは思えない。

桜井ジャーナル

- イラン革命防衛隊の将軍の死によって、彼を崇拝していた親イランのシーア派民兵組織に対する明敏な指南役が不在となり、イラクの不安定な政界に、新たに不穏な動揺が生じている。
- 現在、ソレイマニ氏の支援のもとで築かれた影の権力構造(つまりイラクの公式な制度により構成される国家の上に立つ国家)と、若い世代が先頭に立つ反イラン抗議行動

とのあいだで、これまで以上に血なまぐさい衝突が生じるリスクが高まっている。

- そうなると、イラク指導部としては、イランという後ろ盾に頼り続けるか、イランによる支配の終焉を求める世代の要求に応じるかという選択に悩まされることになる。

- アナリストや外交関係者によれば、イラク指導部は、もしイラン政府寄りの姿勢に傾きすぎれば政治的な混乱が深まるリスクがあり、イラクが機能不全国家として見限られてしまうということを承知している、という。

- 親イランの著名なシーア派政党幹部は匿名を条件に、「イランの影響力増大を拒否しようというイラク国民の決意は高まっている。抗議行動はそうした状況を示している」と語る。「イラクと良好な関係を築きたければ、イランは政策を見直すべきだ」

- ソレイマニ司令官の死亡はイランの力を弱めたが、その一方で、イラクには治安上の手痛い空白が生じている。経験豊富な同司令官は、親イランのイラク民兵勢力に対する最終的な影響力を握っていたからだ。

- アナリストや外交関係者が懸念しているのは、ソレイマニ司令官の経験豊富なリーダーシップと民兵組織の活動を調整する能力が失われた今、イラクにおいて『フランケンシュタイン』で描かれたモンスターが解き放たれたに等しい民兵組織がのさばるのではないか、という点だ。

- イラクで最有力の民兵組織幹部の1人で、ソレイマニ司令官の信頼が厚かったアブ・マフディ・アル・ムハンディス氏も、同じく1月3日の米軍によるドローン攻撃で死亡した。仲間の民兵組織幹部のあいだにも恐怖と不安が広がり、その多くは身を隠し、住居や電話番号までも変更している。